

在宅療養移行に本人・家族が困難感を示す状況と退院調整看護師が心がけている支援

キーワード：在宅療養、退院調整、困難感、看護師

○二所宮秋子¹⁾、坪川トモ子²⁾

新潟大学医歯学総合病院¹⁾ 新潟青陵大学²⁾

I 目的

在宅療養の推進が求められている現在、円滑に退院調整を行うために、退院調整看護師の支援のあり方を明らかにしたいと考えた。退院に本人・家族が困難感を示す状況、および退院調整の際に看護師として配慮していることを明らかにすることを通して、本人が望む療養を支援する看護師の役割について示唆を得ることを目的とした。

II 方法

<対象>P 病院の退院調整部門の看護師 2 名。<データ収集>本人・家族が退院に困難感を示した状況、および困難感を踏まえ退院調整看護師が心がけていることとして、大切にしていること・配慮していることについて半構造的インタビューを行った。時期は平成 26 年 7 月、所要時間は 92 分。<分析方法>インタビュー内容の逐語録から、本人・家族が退院に困難感を示した状況、退院調整看護師が大切に、または配慮していることが語られている文脈を抽出し、端的に表記しコード化した。類似性、相違性を検討しながらカテゴリ化し、退院に困難感を示す状況は小項目、大項目に、退院調整看護師として大切にしていることはサブカテゴリ化、カテゴリ化した。客観性の確保のため、質的研究の実績がある共同研究者と分析し、対象者 2 人に分析結果の確認を得た。<倫理的配慮>研究の趣旨、参加の自由意志、匿名性の確保などを文書と口頭により説明し書面で同意を得た。

III 結果

1. 本人・家族が退院に困難感を示す状況

13 のコードを抽出し、小項目は 6 つ、大項目は 3 つ生成し、本人が希望していても家族が困難を示す、家族も在宅療養を希望していながら介護負担のため実現が困難などの「医療依存度が高く医療処置が必要である」、本人・家族も困難感を示す「病状の不安定さがある」、高齢者世帯で介護者がいない「介護者が高齢、または本人が高齢で独居」であった。

2. 退院調整看護師として大切にしていること

抽出した 24 のコードから 14 のサブカテゴリが生成され、4 つのカテゴリ【安心できる存在】【信頼してもらえる面接】【納得できる療養の支援】【ありのままの本人と本人の意思の理解】が生成された(表 1)。

IV 考察

1. 本人との信頼関係の構築

退院調整における看護師の役割として、岡田¹⁾は、

早期に介入し、患者や家族が安心して退院することができるように支援することであるとしている。本研究でも、入院当日から頻回に顔を出すなど、退院調整看護師の存在を伝え役割を理解してもらうように心がけていた。本人が本音を語るができるよう信頼関係を築くため、早期から本人にとって安心できる存在となることを心がけていたといえる。

2. 実現可能な療養生活に向けた自己決定への支援

本人の本音を確認できた後は、自己決定できるように、在宅療養の必要性を理解してもらえるように支援している。特に、本人と家族の意向に差がある場合は看護師として本人の意思を第一優先にし、本人と向き合い肯定する姿勢をもつことが必要だと考えられる。

表 1 退院調整にあたり看護師として心がけていること

カテゴリ	サブカテゴリ
1.安心できる存在	1)安心してもらえる存在を目指す 2)入院当初から顔を出す
2.信頼してもらえる面接	1)対象者が望む療養の理解に努める 2)対象者の話に集中する 3)リラックスしてもらう 4)受容的に対応する 5)聴く姿勢・聴く意思を伝える 6)対象者と関係を築く 7)対象者を理解する
3.納得できる療養の支援	1)対象者の意向を理解する 2)在宅療養の必要性を理解してもらう 3)介護者の負担を軽減する
4.ありのままの本人と本人の意思の理解	1)本人の意思を第一優先にする 2)対象者を肯定的に捉える 3)対象者と向き合う

V 結論

本人・家族が在宅療養に困難感を示す状況には医療処置が必要、状態の不安定さがあるなどによる本人または家族による困難さなどがあり、それらを踏まえた退院調整看護師の役割は、患者と信頼関係を構築し、本人の意思を第一優先に考え、本人が望む療養の実現を目指し支援することが重要であることが示唆された。

<引用文献>

- 1) 岡田美幸. 退院調整実務者としての視点から. 看護管理, 2005;15(4):271.